

(2) 観光客の動向

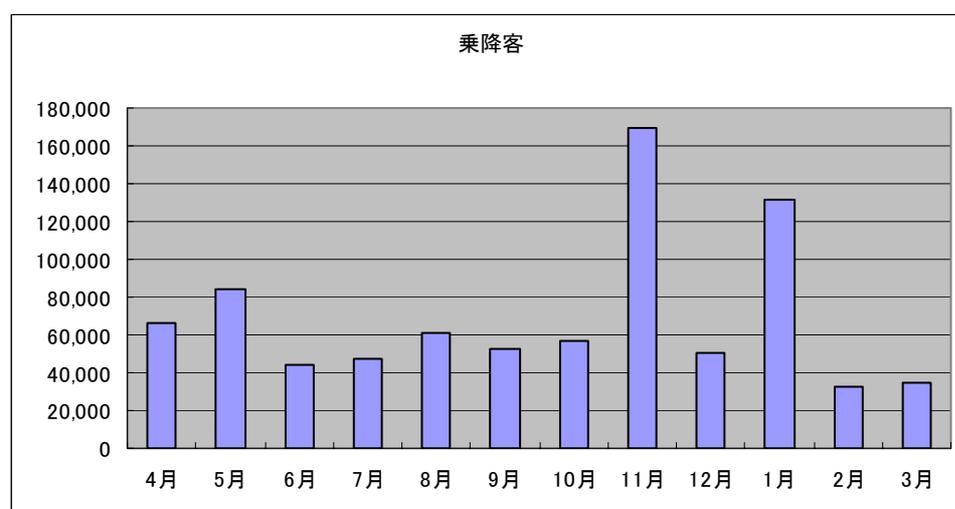
高尾山の観光客は、近年は年間 250 万人前後と言われているが、近年はやや減少傾向にあるという指摘もある。それは社会経済状況の変化や観光レクリエーションの多様化と価値観の変化など様々な要因が考えられる。例えば、昔は小学校の遠足と言えば高尾山であったが、最近は少なくなっている。

観光客の動向を月別のケーブルカー利用者数で見ると、紅葉の 11 月が 21%、正月の 1 月が 16%、新緑の 5 月が 10%で、この 3 ヶ月で全体の 5 割弱を占める。その他の月は 1 割に満たないが、特に 2 月、3 月は 4%と低い。また夏場の 7 月、8 月、それと 9 月も 6 ~ 7%とあまり多くないのが現状である。一般に観光のオンシーズンである夏休みが少ないのは、やはり子ども達やファミリー層の人气がいま一つ足りないことを物語っている。

観光客の特徴は、比較的中高年層が多く、かつリピート客が多いと言われている。また、交通手段は、殆どが鉄道を利用し日帰りするパターンである。

ケーブルカーの乗降客数（平成 17 年度） 出典：高尾登山電鉄(株)資料

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
乗降客 (人)	65,800	84,409	44,470	47,076	61,270	52,439	56,957	169,778	50,853	131,580	32,109	34,671	831,412
構成比	8%	10%	5%	6%	7%	6%	7%	21%	6%	16%	4%	4%	100%



また、観光客の多くは高尾山に登り、薬王院に参拝し山頂をめざす。東京都が行った調査によると入山者の 2/3 は山頂に到達しているという調査結果がある。山頂で一服すると往復 3 時間以上の行程であり、多くの登山者は下山後、里を回遊せずに家路を急ぐ。

高尾の里の商店街は、登山の観光客が里を巡り、回遊してくれること、そして食事や土産品の購買等をしてくれることを期待している。しかしながら、里に回遊する魅力に乏しいことや、寄ってみたいと思わせる観光拠点等が存在しないのが現状である。また、一般に登山やハイキングの観光は、土産品等の消費が少なく、高尾山も例外ではない。

一方、昨年より始められた地元の取り組み、冬ソバキャンペーンは好調である。冬ソバだけを食べにくる客層が増えている。冬季の観光客が少ない時期の観光として注目される。

平成 17 年 3 月 21 日（休日）調査

3 月 21 日は晴れ。全部で約 5,000 人が入山し、そのうち山頂に到達した人は 3,337 人（到達率 67%）であった。

多摩環境事務所が（財）国立公園事務所に調査委託（東京都環境局）

(3) 旧東京都高尾自然科学博物館の利用状況

ア 入館者数の推移と月別の入館者数

旧博物館は、参道の南に昭和 36 年に建設され、平成 15 年度まで公開されていた。施設及び展示施設ともに古く、平成 11 年度までの入館者数は 6～9 万人程度であったが、閉館間近の平成 12 年度以降はイベント等の集客で 10 万人を超えた。

下表に示す平成 14 年度の月別入場者数をみると、5 月が 19%、続いて 11 月が 17%で、この 2 ヶ月で全体の 36%を占めていた。若葉と紅葉の季節である。一方、冬場の 12～2 月は 2～3%ときわめて低いが、6 月、7 月及び 9 月もそれぞれ 5～6%と低い。1 日あたりの入館者数は、平均約 370 人であった。最も多い 11 月では 1,000 人弱であり、平均の約 3 倍である。このように、季節によって、入込みが大きく変動していた。

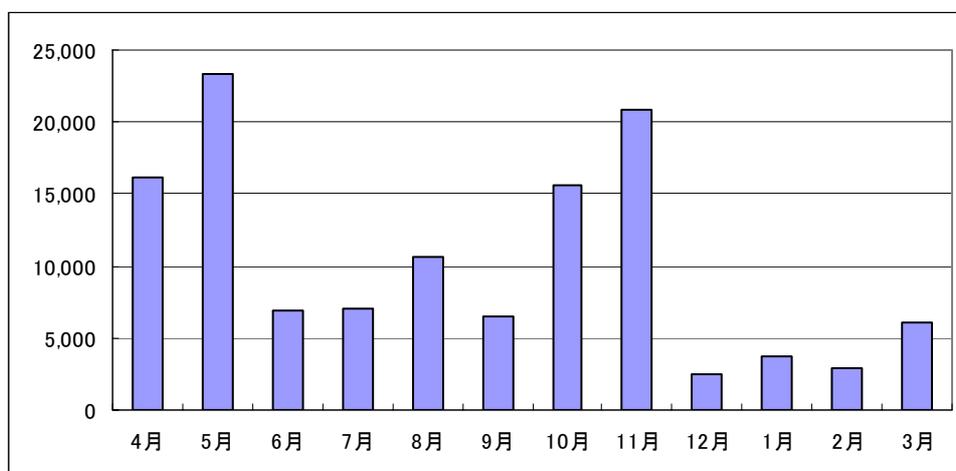
この入館者数と季節変動は、高尾山の観光客と切り離せない拠点施設の運営を考えるうえで参考になる。

旧東京都高尾自然科学博物館の入館者数の推移 (千人)

年度 (平成)	5 年度	6 年度	7 年度	8 年度	9 年度	10 年度	11 年度	12 年度	13 年度	14 年度
入館者数	87	67	83	90	82	84	91	103	117	122

東京都高尾自然科学博物館の入館者構成 平成 14 年度 (人)

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
入館者数	16,122	23,356	6,855	7,062	10,579	6,510	15,572	20,895	2,448	3,795	2,940	6,078	122,212
構成比	13%	19%	6%	6%	9%	5%	13%	17%	2%	3%	2%	5%	100%



出典：旧東京都高尾自然科学博物館 平成 15 年度事業概要

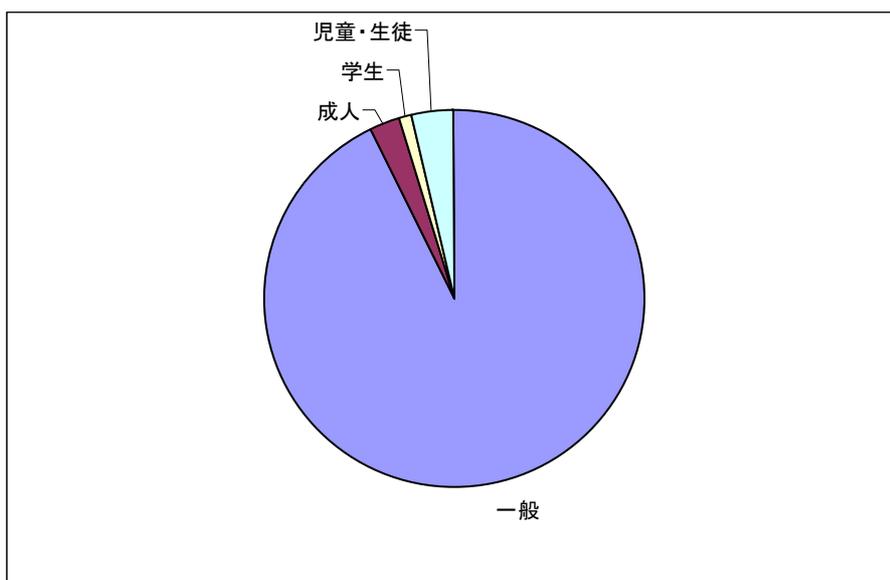
この入館者数には、トイレ利用のみも含まれる数字である。

イ 団体客の構成

平成 14 年度の入館者構成をみると、延べ入館者約 12 万人のうち一般客が 93%、約 11 万人を占め、団体客は 7%、約 9 千人である。団体の内訳は、児童・生徒が全体の 4%で約 4,400 人で、続いて成人が約 3,000 人、学生は約 1,400 人である。団体数は延べ 195 で、平均 45 人ほどの人員である。

入館者数の構成 平成 14 年度(人)

	一般	団体				合計
		成人	学生	児童・生徒	計	
人数	113,421	2,966	1,356	4,469	8,791	122,212
構成比	93%	2%	1%	4%	7%	100%



出典：旧東京都高尾自然科学博物館 平成 15 年度事業概要

計画編

1 計画の経緯

(1) 東京都高尾自然科学博物館機能の継承

旧博物館が平成 16 年 3 月に閉館し、その跡地と所蔵資料が八王子市に移管された。移管にあたっては、博物館機能を継承した施設の整備が要請されている。この博物館機能を継承した施設（以下、拠点施設）は、高尾の里、高尾山観光に大きな影響を与える計画であり、地元の期待もきわめて大きい。

(2) 圏央道インターチェンジの完成

平成 21 年度には圏央道の(仮称)八王子南インターチェンジが完成予定となっており、より広域的な観光需要の発生が期待され、そのための対応が必要とされる。

(3) (仮称)高尾の里整備検討協議会の提言

八王子市では、東京都からの用地等の移管に伴い、平成 17 年度に学識経験者や公募市民等からなる(仮称)高尾の里整備検討協議会を設置し、高尾山口駅周辺の「高尾の里」及び拠点施設の基本的な整備の方向等の検討を行い、提言を受けた。

提言は、緑豊かな自然、生態系の維持・保全、聖なる山としての歴史を十分理解したうえで、「高尾の里」には「新しい門前町＝現代を生きる門前町」というコンセプトで、そして、拠点施設となる博物館跡地等の活用には「高尾の自然、歴史文化や市全体の伝統文化の発見・発信の場」というコンセプトでまとめられた。

その具体的な提言の内容は、次に示すとおりである。

ア 高尾の里について

「新しい門前町＝現代に生きる門前町」のコンセプトは、高尾山とその周辺らしい美しい景観の創造、楽しさや賑わい、ぬくもりを感じてもらえるような観光地としての環境を整えること、さらには高尾山の自然環境の情報及び八王子・高尾の情報発信の拠点とすることである。そして、ここだけにしかない食や物産、文化等を提供することである。観光地としては当たり前のことであるが、現代に生きる里の人々が温かいもてなしの心を共有し、一層の向上心と戦略をもって取り組むことである。

そして

- ・ 老若男女が憩い、楽しめる滞留環境をもった新しい門前町＝現代に生きる門前町づくり
- ・ 培われた自然と文化的な背景を継承しつつ、子供・若者も楽しめるような環境づくり
- ・ 訪れたいと思ってくれる里づくりを展開することである

イ 拠点施設について

拠点施設の建設は、「高尾の里」における最大の開発であり、市民や地域の人々の期待はきわめて大きいものがある。現在は大きな観光学習文化施設がなく、「高尾の里」に滞留する要素が少ないのが現状である。この施設により「高尾の里」の回遊性が高まり、そして人々が楽しく過ごせるような施設整備が望まれている。このような背景の中で、拠点施設には、高尾山や薬王院等の自然、歴史等と密着した機能、及び八王子の独自の文化の導入を図り、文化的な奥行きと話題性を高めながら、地域観光の推進をめざす。また、高尾からの情報発信、伝統文化の育成に努めるとともに、市民が自ら活用、参画でき、様々な交流が育まれるような開かれた施設を展望する。そして、拠点施設のあり方として次に示す基本理念と導入機能が示された。

計画の基本理念の概要基本理念	導入機能等	内容
高尾の自然と歴史を知り、魅力を発見・発信できる場	博物館機能	旧博物館の収蔵品等を中心に高尾山の自然や歴史をわかりやすく展示し、教育普及（学習）活動を担う。
	体験学習機能	高尾山を自然のフィールドとして、子どもや一般市民を対象とした森林教室等、魅力的な体験学習機会を提供する。
	交流機能	地域や市民の参加、協働を通してイベント等を開催し、様々な交流機会を創出する。
	観光機能	八王子・高尾山に関する観光情報や博物館機能等の情報を総合的に発信する。
伝統文化を楽しく学習できる文化的な香りが漂う環境	<ul style="list-style-type: none"> ・八王子車人形の公演（国・記録選択無形民俗文化財、東京都指定無形文化財） ・市内の伝統芸能の公演 	市の代表的な伝統芸能である八王子車人形やその他伝統芸能の公演を行い、観光のみならず文化という厚みをもたせる。なお、芝居小屋は明治22年に建設された浅川地区内の古民家（旧金子邸）を活用する。
自然を活かした個性あるさわやかな憩いの空間	<ul style="list-style-type: none"> ・イベント広場 ・腰を下ろして休めるロビ－的な空間 ・水資源の活用 等 	高尾の里の大きなイベントを行える広場を確保するとともに、屋外での体験学習の催しやレクリエーションが楽しめる潤いのある環境を整備する。

博物館機能：調査研究、収集保管、教育普及活動のうち拠点施設は展示・講座・体験学習などの、いわゆる教育普及活動を担う。

2 計画の基本方針

(1) 計画の基本方針

(仮称)高尾の里整備検討協議会の提言による基本理念をうけ、高尾山という固有の歴史文化と貴重な自然資源を活かしながら新しい、親しみのある知的レクリエーションを創造すること、そして、この拠点施設が、ハード、ソフトの両面において高尾の里の先導的な役割を担って行くことを目標に、次に示す4つの基本方針を定める。

4つの基本方針

自然を愛する心を育てる場とする

観光客のための温かみのあるビジターセンターとする

臨場感あふれる伝統文化の体験の場とする

市民や地域とともに協働してつくる交流の場とする

利用者の多くは、250万人といわれる観光客である。これら人々を温かく迎えること、そして高尾山の自然や歴史文化、伝統芸能を紹介しながら観光の幅を広げてもらい、より高尾山を好きになってもらいたいという目標がある。いわゆる登山客のビジターセンターではなく、高尾山の総合的なビジターセンターと捉え、高尾山の自然や歴史文化を発見・発信する。

高尾山の魅力は、都市部に最も近い貴重な自然環境をもつことである。さらに、そこで培われてきた人間の営みと山を敬う人々の想い、それが高尾山さまという言葉になり聖なる山という心持ちを人々に与えている。自然と文化という対立軸ではなく、「人間が自然に手を加えて形成した物心両面の成果」(広辞苑)が文化なら、まさにそれが、この高尾山にはある。

ここで創ろうとしている施設は、このような高尾山独自の自然と歴史文化を外国人を含む多くの人々に紹介して、歴史文化を知ってもらうとともに、資料を通して生物や環境への理解を促し、自然を愛する心を育てるためのものとする。

さらに、八王子車人形を中心とした伝統芸能の公演を誘致し、八王子固有の文化をライブで鑑賞できるものとする。

また、地域や市民との協働で、既に催されている若葉まつりやもみじまつりをはじめ、老若男女が楽しめる多彩なイベントを展開して新しい交流が育まれる環境を整えていく。

来て良かった ためになった 人に教えてあげたい。誰もがまた来たいと思ってくれるようなところが理想像である。

さらに、拠点施設には、高尾の里の整備を先導するという重要な役割がある。例えば、ハード面では、門前町にふさわしい落ち着いたまちなみの形成、看板やサインの統一感のあるデザイン、あるいは花や緑の配置、水の活かし方など、ソフト面では観光客や外国人

の受け入れの方法、そして高尾山を中心とした観光のあり方など、これからの里づくりに向けて、多方面にわたる取り組みを展開していくきっかけとなるものである。この施設が完成して完結するのではなく、高尾の里の景観形成はもちろん、観光客を温かく受け入れる心、高尾山とその里でつくる文化的な香りが醸成されていくことが望まれる。

このような高尾の里づくりとの関係を十分配慮し、地域との連携を図りながら事業を進めることが重要である。

知的レクリエーションとは、今までのハイキング、登山ときわめて目的型のアウトドアのレクリエーションとは違い、自然や歴史文化にふれることを通じて、観光と学習が有機的に結びつく新しいレクリエーション像をいう。

(2) 基本方針の内容

ア 自然を愛する心を育てる場とする

高尾山の観光客のなかで、なぜ高尾山の自然が守られてきたかを知る人は少ないのではないか。

豊かな自然の紹介はもちろん、山岳信仰の場、あるいは中世の戦略上の森林保護、人々と自然との共生の歴史など、高尾山の自然と歴史文化を学習する場を提供する。

わかりやすく、かつ興味がわく展示が基本である。特に、高尾山の観光客や校外学習の小中学生が、興味深く、かつわかりやすく理解できる展示を行う。一般に展示とは、モノを見せるということに主眼を置いてきたが、ここでは、さらに人（指導解説員）が介在した丁寧でわかりやすい説明を中心に置く。人とのコミュニケーションが、資料の存在価値を倍増し興味を抱かせる、すなわちライブ性が高まり人を引き付ける。ボランティアを中心とした指導解説員等の人材育成を図る必要がある。

また、自然の魅力を知ってもらうには、学術的に裏付けられた確かな視点で自然をリアルに展示できるかに掛かっている。驚きと発見を通して、自然界の不思議に触れてもらう。そして自然のもつ神秘性から環境保全まで想像を巡らせてもらえるような展示、それが今日の博物館機能の役割でもある。特に、次代を担う子どもたちに、自然の魅力を知ってもらうような取組みを充実する。

さらに、本物の自然が隣にあることを常に忘れず、自然と一体となった展示方法等の開発を進める。

イ 観光客のための温かみのあるビジターセンターとする

これまで高尾山の山頂にある東京都高尾ビジターセンターは、ハイキング客への情報提供や体験教室を行っている。

本計画の拠点施設は、山頂の高尾ビジターセンターに対して、高尾山と高尾の里の総合的なビジターセンターであり、自然のみならず高尾山固有の歴史文化を紹介し、高尾山の魅力を感じてもらうところである。ここに来れば、高尾山のことや八王子の観光の情報が得られ、様々なイベントを通して、楽しい時間をもてる場所である。そして、拠点施設の利用者の多くは老若男女の観光客であり、また外国人の誘致も課題であり、それらの人々が安らぎをおぼえるような温かみのある休息の場を提供する。

また、トイレ利用だけの目的で立ち寄る人々も多いであろう。そのような時でも、ちょっと中を覗いて情報を得て、そして休んでもらえるような快適な空間を用意する。その際、ボランティアなどが対応し、フェースツーフェースでの交感の場となれば良質な空間となるであろう。そこには、小さいけれど高尾山を舞台とした交流が芽生え、この交流 = ふれあいこそが、新たなネットワークの芽生えであり、高尾の里づくりの資源となる。

ウ 臨場感あふれる伝統文化の体験の場とする

観光の楽しみの一つは、その土地でしか見られない芸能を鑑賞できることである。芸能の公演は、生＝ライブを鑑賞することでしか味わえない臨場感を鑑賞者に提供する。

公演の中心に八王子車人形を誘致し、定期的に公演を行う場を設ける。八王子車人形は、海外でも好評を博し、国内的にも有名な伝統芸能であるが、実際に鑑賞した市民等はまだまだ少ないと思われる。ここに、八王子車人形や市内の伝統芸能の公演の場を設けることによって、高尾山観光に文化の厚みを持たせることができるとともに、地域文化、さらには日本の伝統文化を育て、継承する場を持つことにもなる。



八王子車人形

八王子車人形は「ろくろ車」という、前に2個、後ろに1個の車輪がついた箱型の車に腰掛けて、一人の人形遣いが一体の人形を操る特殊な一人遣いの伝統人形芝居です。

江戸時代の終わり頃、現在の埼玉県飯能市に生まれた山岸柳吉（初代西川古柳）が考案し、その後、近郊の神楽師（神事芸能を専業とする人）を中心に分布し、農山村や八王子織物の生産にかかわる人の芸能として親しまれてきました。

ろくろ車の発明は、それまでにあった江戸系の三人遣いの人形芝居を合理化したもので、少人数の座員で、簡易な舞台での公演を可能にしました。また、人形の足が直接舞台を踏むことができるので、力強い演技やリズムカルでテンポの早い演目を行うことも可能です。舞台を選ばないことから、他の芸能との共演も可能で、演出の幅が広いのも特徴です。

現在は八王子市の西川古柳座のほかに、埼玉県三芳町の竹間沢、東京都西多摩郡奥多摩町の川野に車人形は伝えられています。

なお、公演は、国内のみならず韓国、スウェーデン、ギリシャ、イタリア等、海外にも招かれています。昭和58年に東京都無形文化財、平成8年に、国・選択無形民俗文化財に選択されました。

（出典：八王子車人形パンフレット 西川古柳座）

エ 市民や地域とともに協働してつくる交流の場とする

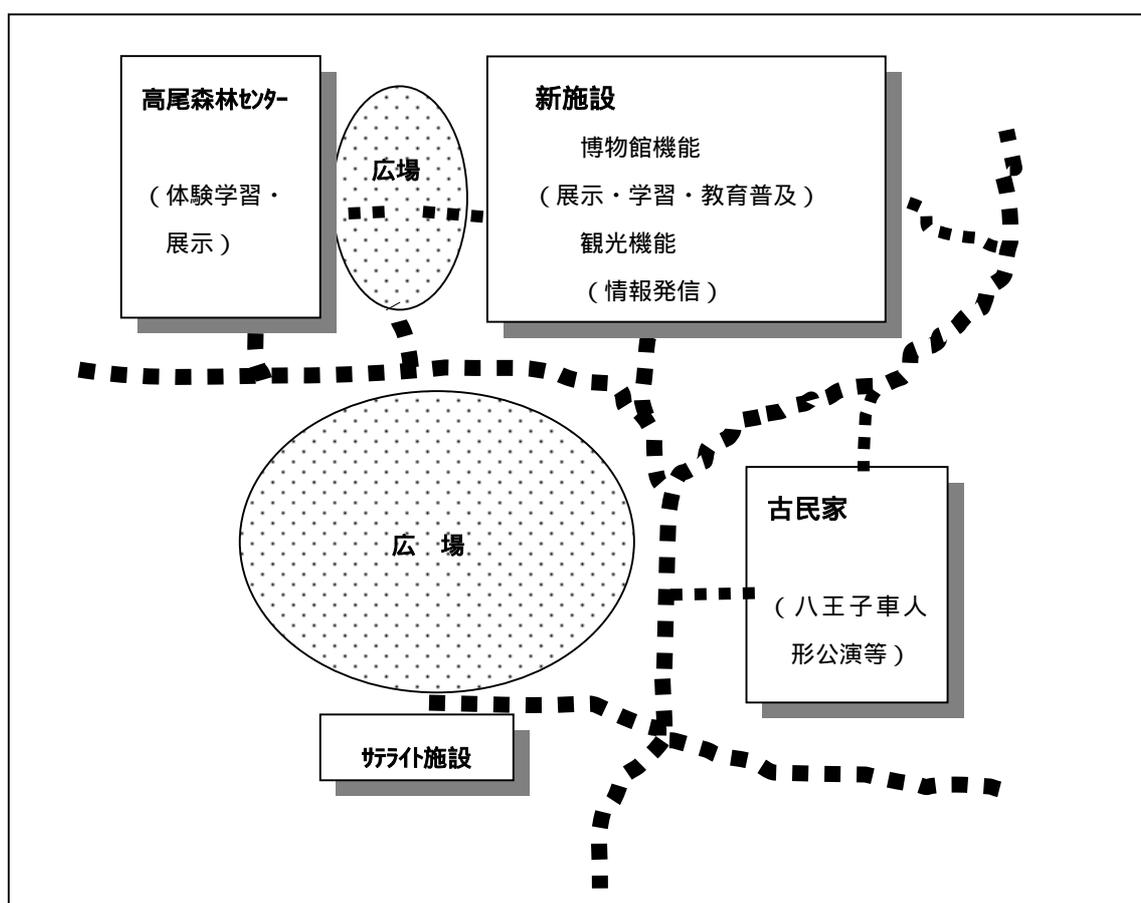
拠点施設の内容は、観光機能から博物館機能まで、きわめて多様で専門性が要求され、かつ、それらが有機的に活動して相乗効果を高めていく必要がある。このような施設の運営は、スタッフだけで行うことは難しく、多くのボランティアや市民団体等の参加が期待される。

施設の運営にあたり、市民や地域の人々との協働体制を、一つの柱とする。市の郷土資料館や夢美術館では、ボランティアの登録を行い指導解説員として活動している例がある。今回はさらに、進んで企画や製作、あるいは伝統芸能の公演支援などパートナーとして、より積極的に係わってもら体制をつくることも考えられる。

3 拠点施設の全体構成

(1) 施設構成

拠点施設は、本計画の中心であり観光機能や博物館機能をもつ新施設と、地元の明治時代の民家を移築改修し、主に八王子車人形の公演を行う古民家(芝居小屋)、そして、平成19年4月2日に先行してオープンする高尾森林センター(林野庁)に加え、各施設をつなぐ散策路と人々の集まる広場で構成する。この広場には屋外イベント等の支援施設として小さなサテライト施設を設ける。



各施設の規模は、概ね次に示すとおりである。

建物名	階数	延床面積
新施設	2 F	1,500 m ²
古民家	2 F	300 m ²
サテライト施設	1 F	100 m ²
高尾森林センター	2 F	480 m ²

(2) 導入機能の枠組み

機能は大きく博物館機能（学習・教育普及）、観光機能、伝統文化機能、交流機能等に分けられるが、相互に関連性のある事業展開を行い、相乗効果をあげるような運営を図る。
導入機能の枠組み

機能	事業等	主な内容
博物館機能 (展示・学習・教育普及) 自然を愛する心を 育てる場	常設展示	・八王子および高尾山全体のアウトライン紹介 (高尾山の歴史文化・高尾山の自然・四季)
	企画展示	・動植物資料を用いたテーマを絞った展示 ・広い視点からの八王子や薬王院等に関する資料の解説展示
	学習支援	・校外学習等に対する受け入れ体制
	体験学習	・自然素材を使ったクラフト等の講座開催、地元の藁細工等の指導(高尾森林センター、地元と協働)
	各種事業の開催	・自然観察等の現場での解説 ・ミニ自然学習登山の実施
観光機能 (情報発信) 観光客のための温かみのある ビジターセンター	インフォメーション (主に人による対応)	・高尾山観光、八王子観光案内 ・外国人観光客への対応
	観光情報の発信 (主に装置による対応)	・映像装置を活用したリアルタイムの観光情報の提供 ・IT機器等による情報検索・多言語による情報発信
	休息の場の提供	・快適な休息場(ベンチ、トイレ、広場など)の提供
伝統文化機能 臨場感あふれる伝統文化 の体験の場	伝統芸能の発信	・八王子車人形(西川古柳座)の定期公演 ・伝統文化関連団体等の公演 ・伝統芸能の体験(教室の開催など)
交流機能 市民や地域とともに協働して つくる交流の場	イベント等の開催	・内部、外部空間を活用した各種イベントの開催
	各種団体との交流	・支援グループ、市民団体などとの連携
	広報・啓発	・広報誌や自然関連パンフレットの発行(自然団体等と連携) ・ホームページの管理運営
企画調整機能 (高尾森林センター等との調整)	関連機関・地域との企画調整	・高尾森林センター等も含めた企画調整のための会議などの設置
	指導解説員の養成	・ボランティアなどのスキルアップ講座等
サービス機能 (収益事業)	物販	・キャラクター開発を図り、魅力ある土産品の開発販売
	喫茶	(設置については地域等と調整が必要)
総合運営機能	管理事務	・施設維持管理業務

(3) 市民・地域との協働体制と関連施設との連携

ア 博物館機能のあり方と市民・地域との協働体制

今日の博物館は、資料の収集・保管、調査・研究を基礎とした施設内での完結した展示等を中心とした教育活動型から、市民参画や地域と関わりながら、生涯学習支援等を行い外部に開かれた機能分担型へと変化している。ここで構想する博物館機能は、高尾山の自然や歴史文化を中心としたものとする。

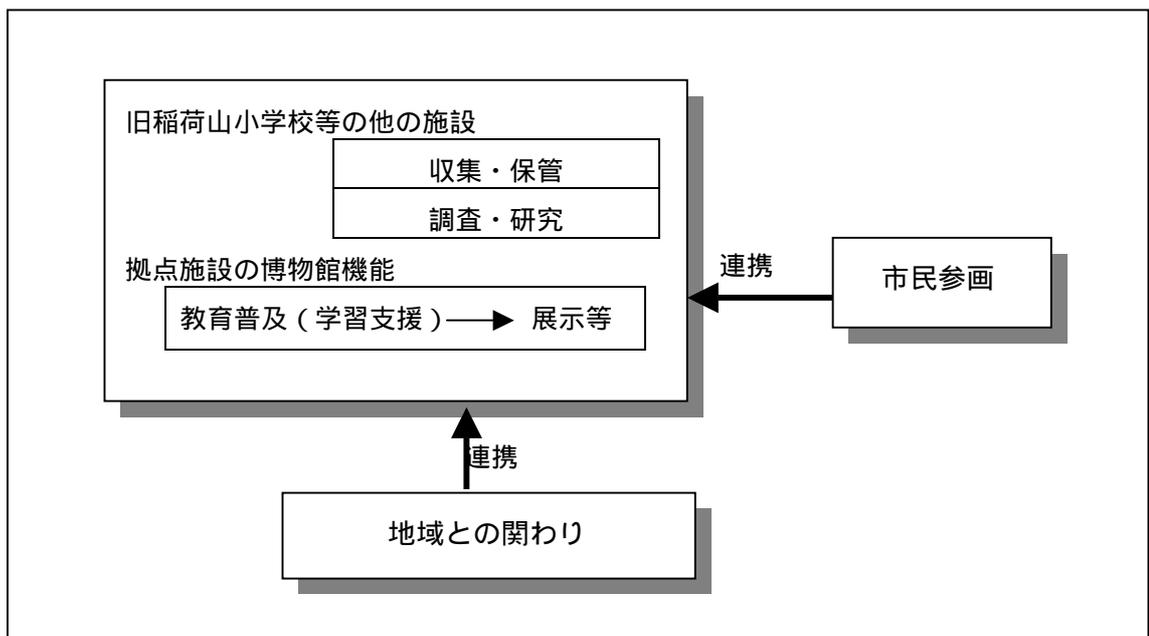
また、博物館機能は調査研究、収集保管、教育普及という基本的な事業があるが、ここでは展示などの教育普及（学習）活動を中心とし、調査研究、収集保管は旧稲荷山小学校等の他の施設で行うこととする。

運営の方向として、市民参画型の体制を構築する。展示の説明、体験学習等の指導はもちろん、各種企画の発案や具体化等、施設職員と一体的に活動できる体制を構築する。

一方、集客力のある拠点施設は、地元の観光環境を大きく左右する存在である。拠点施設と地域が、里づくりにおける基本的な考えを共有して、相乗効果をあげられるような運営を目標に、地域と協働で取り組む体制を築く。

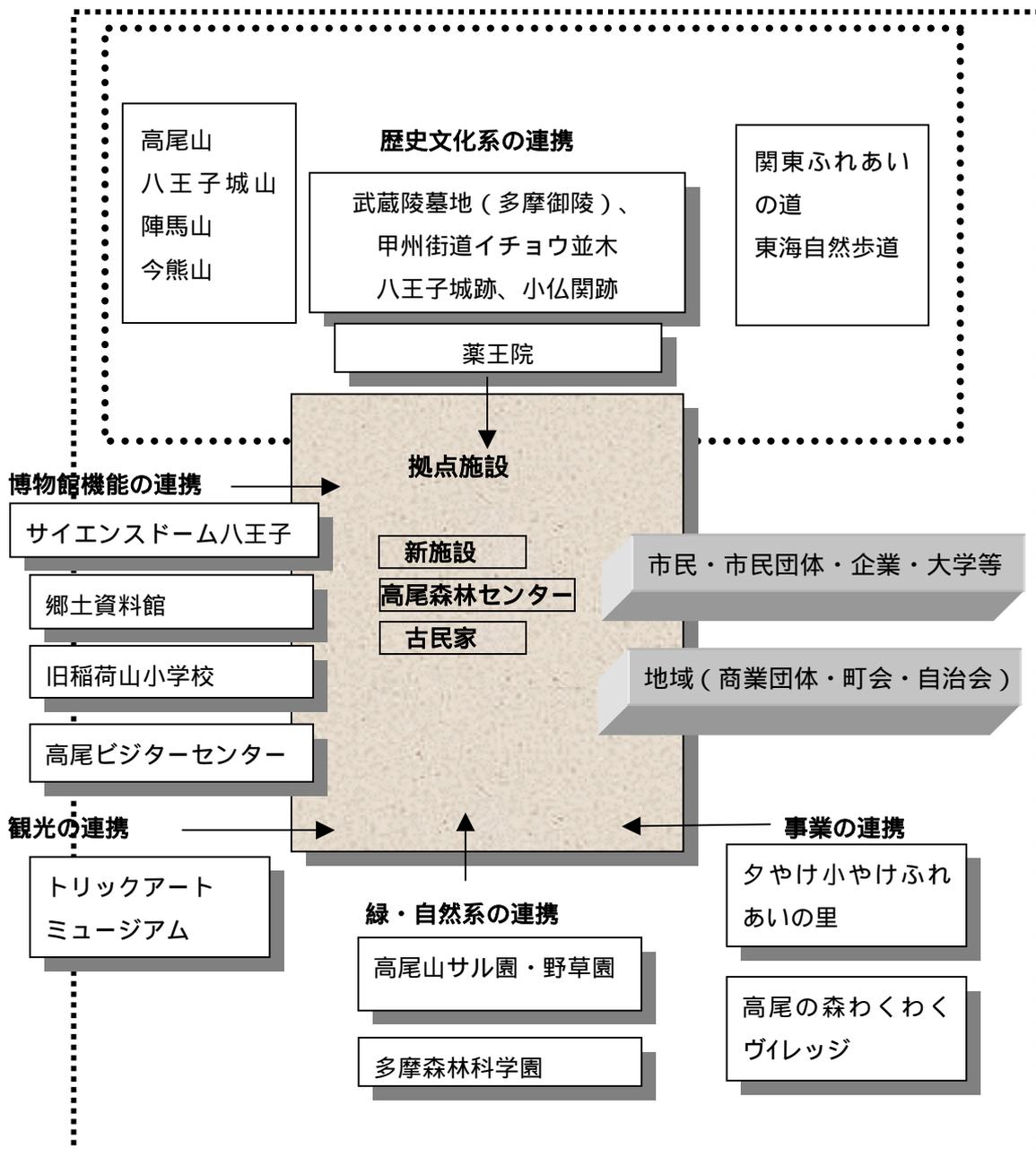
また、観光面の相談や情報提供等において、高尾・陣馬ファンクラブ等のボランティアと連携した運営体制をつくる。

博物館機能のあり方



イ 関連施設との連携

拠点施設には、市の観光と博物館機能を中心とした新施設と八王子車人形等の公演を行う古民家、及び林野庁の高尾森林センターが立地する。また高尾山山頂近くには高尾ビジターセンターや高尾山サル園・野草園があり、周辺には多摩森林科学園、さらに旧自然科学博物館の資料を保管する旧稲荷山小学校がある。このように拠点施設周辺には自然系の観光学習施設が立地しており、これら施設と相互に関連を持ちながら、相乗効果をあげていくことが運営上、重要な課題である。そのためには、自然や文化・あるいは生涯学習に関する事業内容の調整や情報の共有と広報等の連携など、企画調整をつかさどる連絡組織も必要とされる。



(4) 拠点施設利用者層と受け入れ体制

ア 利用者の想定と受け入れ体制

拠点施設の利用者は、年間250万人といわれる高尾山観光客が多くを占めるであろう。利用者の特徴は、背中に小さめのリュックを担いだ人々で中高年層が多い。その他、校外学習の小中学校の児童生徒、各種イベントの参加者、あるいは自然系の研究者や学生、さらに八王子車人形を鑑賞にくる人々達である。拠点施設整備後は、拠点施設や高尾の里を目標に来る人々も増えるであろう。

イベント等の開催により若者やファミリー層が増え、展示の工夫や体験学習講座等の充実により社会見学の子も達が増え、入園してくる姿が理想である。また、外国人の受け入れ体制を充実させ、それが評判を呼び外国人の比率が増え徐々に国際色が豊かになっていく。八王子車人形の公演やイベントを夜間に催せば、夕方以降も観光客をひきつけることができる。

拠点施設ができることで、観光客の構造が変わるとともに、高尾山観光のイメージも大きく変化することになる。このため、拠点施設はもちろん、高尾の里の観光受け入れ体制は、中高齢者、小中学校の遠足・団体、女性、ファミリー層、そして外国人観光客等、多様な需要に対して、ハード面・ソフト両面の対応が必要とされる。

利用者層の想定

一般利用者	高尾山観光の観光客
小中学校の校外学習	市内小中学校、周辺市町の小中学校 年100回以上の見学を想定
外国人観光客	年々増加しており、今後も増加する可能性は高い
八王子車人形観賞	中高年の女性層、社会見学や団体ツアーもあり
各種イベント	イベント参加者、ファミリー層
専門分野の研究	学生、研究者、自然系市民団体関係者

イ 利用者数の想定

利用者数は、トイレや庭に入るだけの人も含めると、現時点で想定することは困難であるが、開設当初は高尾山の観光客の多くが見学に訪れると考える。これらの人たちをいかに引き付けていくかが、施設運営にあたって重要な課題となる。

拠点施設ができることで年間250万人と言われる高尾山観光客が飛躍的に伸びるといふより、多様な年齢層の人々が来訪し、これまで高尾の里に滞在することが少なかった観光客が、時間を楽しみ、好印象を持って、「また来たい。」と思ってくれるようになることが必要である。

平成18年度観光客推計では、「高尾山口駅の乗車人員のうち約94万人と、高尾山麓駐車場の利用人員約9万人及び高尾山祈禱殿駐車場の利用者約4万人の合計107万人が高尾山を訪れる」とされている。このうち、約半数が拠点施設を訪れるとすると約50万人程度の利用客が想定される。

ちなみに、旧博物館の閉館前10年間の平均入館者は、9万3千人であり、閉館直前の平成14年度には12万人が入館していた。新施設においても博物館機能を継承することから、少なくとも同程度の人を訪れ、開設当初は15万人以上が訪れると予想される。

さらに、旧高尾森林センターでは年間3万人程度が体験教室を受講していたが、新しい高尾森林センターとの連携のもと、新施設においても体験学習機能を充実させることにより、両施設を合わせて5万人を超える利用客が、また、古民家では、八王子車人形やその他の伝統芸能などが1日2回程度公演できれば、約4万人の観客が見込まれる。

この他、観光情報の提供により、高尾山観光、八王子観光の発信源となり、多くの高尾山を訪れた多くの観光客の立ち寄りが期待できる。さらに、これまでケーブルカーの清滝駅前で開催されていた若葉まつり、もみじまつりや森林マラソンを拠点施設内のイベント広場を会場とすることにより、多くの利用客が見込まれる。あわせて、せせらぎ（親水機能）や四季折々の花や木々のある広場（植栽等）が整備されることにより、これまで訪れる人が少なかった夏休みの時期も小さな子供連れのファミリー層が一日を過ごす拠点となり、施設内部のみならず外部のみの利用客も大幅に増加すると考えられる。

(5) 拠点施設の事業効果

拠点施設ができることによる事業効果は次のように想定される。

拠点施設の事業効果

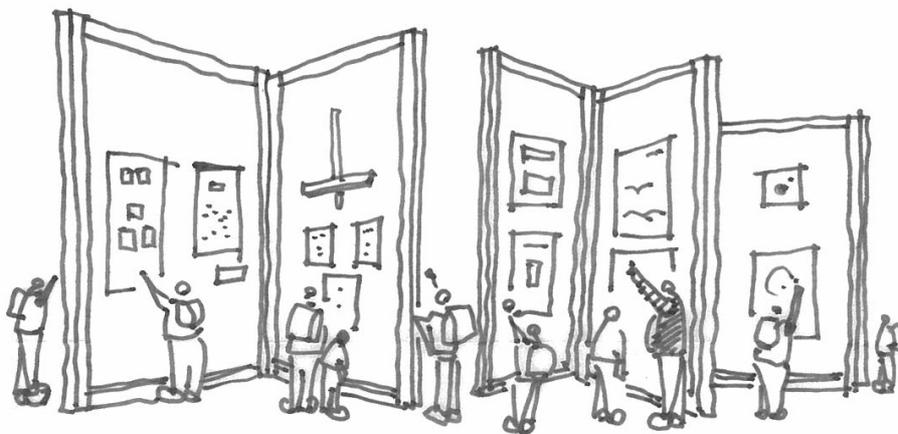
事業効果	内 容
高尾山観光の新たな展開	拠点施設に博物館機能(展示・学習・教育普及)、体験学習機能、さらに八王子車人形の公演やイベント等の開催の場が整備されることで、高尾山観光に学習や文化、交流要素が加わり、高尾山観光の姿を大きく変える契機になる。また、施設内で楽しむ環境を整備することで、雨天時の観光対策が充実する。
総合的な観光情報の提供による効果	高尾山のみならず八王子の観光情報全般を提供することで、市内の観光ネットワークの連携が増し、国内のみならず海外を含めた観光振興につながる。
観光サービス機能の向上	清潔なトイレや誰でもトイレ、待ち合わせ・休息スペースを提供することで、高尾の里の観光サービス機能が向上する。
生涯学習の拠点形成と交流と協働の場の形成	高尾山の自然や歴史文化を学習する場が整備されることで、市の生涯学習の拠点が形成される。多くの市民が訪れるとともに、ボランティア活動等への参加を通して、地域・市民等の交流と協働の場が形成される。
校外学習活動の拠点形成	高尾山の自然とそれを学習できる場が整備され、校外学習等を通して自然環境の魅力を知り、特に子供達の自然を愛する心を育む学習の場が形成される。
レクリエーション活動の場の形成	イベントや各種祭りを実施すること、安らぎの環境を提供することで、市民が気軽に楽しめるレクリエーション拠点が形成される。
伝統芸能の発信と育成の場の形成	八王子車人形等、伝統芸能の公演の場をもつことで、八王子の伝統文化を発信することができるとともに、それを育成支援する場が形成される。
高尾の里の景観形成に与える効果	施設のデザインや緑と水の取り入れ方、さらにサイン、ベンチ等のストリートファニチュアを開発することで、高尾の里の景観形成における先進的なモデルを具現化することになる。
市の新しいシンボル施設の建設	市の西の玄関口にあたる位置にあり、拠点施設の建設はソフト面のみならず、甲州街道からの景観的な新しいシンボルとなる。
高尾の里の地元経済に寄与	大きな観光学習文化施設が完成することで、利用者が高尾の里を回遊し、滞留することにより、飲食や土産品購入等、地元への経済波及効果が期待できる。

具体的な事業プログラム

(1) 博物館機能（展示・学習・教育普及）

ア 常設展示

高尾山の自然と歴史文化のアウトラインを展示する。展示空間は閉鎖的にならず、ラウンジ空間と一体的に設け、休みながらも鑑賞できるような環境とする。そして、可能な限り指導解説員がわかりやすく説明するような解説体制を充実する。ただ見るだけでは把握できないことを丁寧に説明することで、理解されることはきわめて多い。また、展示空間は高尾山の独特の雰囲気醸し出すような内容とする。なお常設展示は無料とする。

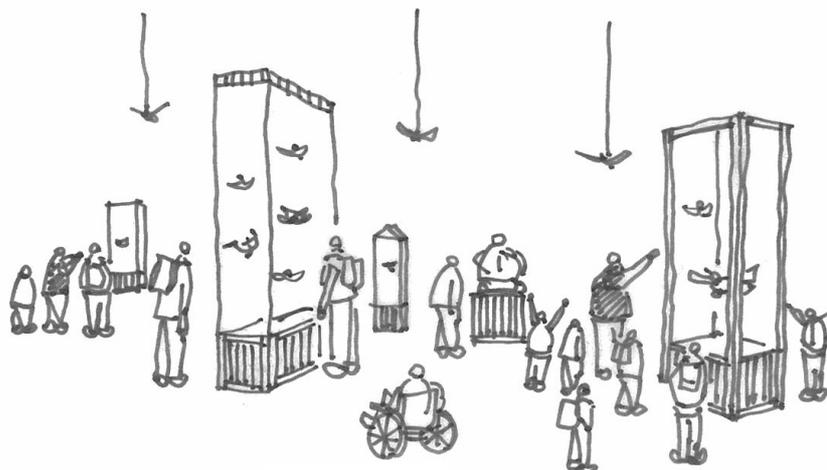


イ 企画展示

八王子その周辺に関する資料や旧博物館から移管された資料、及び薬王院の古文書等の貴重な資料を、年に数回テーマを定めて企画展示する。展示の基本は、高尾山の自然や歴史を深く掘り下げた展示とするため、生の資料の存在に目を向け、テーマを絞った展示や物語性のある展示等を構想する。本物のもつ迫力をいかに生かして展示するかが鍵である。また常設展示同様、専門的知識を持つ者による内容のあるガイダンスを行う。

また、関連の市民ボランティアや関係団体との協働で企画立案から制作までを行う体制を構築する。専門性を高めるうえで、市内の大学と協働することもきわめて有効な取り組みである。

なお企画展は、有料にするケースもある。



(2) 観光機能

ア インフォメーション（主に人による対応）

ここは、高尾山や八王子の観光及び博物館機能等、拠点施設に関する相談を受ける総合的な窓口である。相談内容は、一般的なことから専門的なことまで幅広く、レファレンス能力を養成する必要がある。特に、専門的な相談については、ジャンル別にネットワークを構築し説明できる体制をつくる。

また、高尾山にも外国の観光客が徐々に増えている。今後は中国や韓国からの観光客もさらに増えると予想されるためカウンターの案内は英語はもちろん、中国、韓国語の対応も図る。館内はもちろん高尾の里や高尾山のサイン類、パンフレットもこれら外国語の対応を図る。

インフォメーション



イ 観光情報の発信（主に装置による対応）

映像装置等により高尾山の自然・歴史文化や八王子の観光見所を紹介する。20人程度の小団体が一度に見ることが出来るスペースを用意する。また高尾山に関する図書コーナーやパソコンでの情報検索コーナーを設ける。

映像による観光情報

パソコン検索



ウ 休息の場の提供

休息の場は一般的には事業と取り上げないが、ここではあえて1つの事業とする。それは、高尾山の懐として観光客を温かく迎える場の形成をめざしているからである。登山のあと、帰路を急いでいた観光客の足をここに向かせる内容をもつこと、そこにはハードのみならず温かみのあるホスピタリティが要求される。

ハード面はベンチやトイレの提供であるが、ソフト面は受け入れるスタッフの対応と笑顔であり、ちょっとした会話のやり取りであろう。簡単なようで、もっとも難しい内容であるが、このホスピタリティが、高尾の里全体に染み出していくような展開を期待する。

ウ 学習支援

昭和の高尾山は遠足のメッカであった。今日ではそれが以前より少なくなりつつあるが、この博物館機能が整備されれば、展示による学習とフィールドでの山登りを同時に体験できることになり、自然系の社会見学の環境が新しく整うことになる。旧博物館も、このような要素は持ち合わせていたが、どちらかという資料の展示に留まり、子ども達の受け入れ体制が充分とはいえなかった。高尾山をわかりやすく説明する展示と、丁寧に説明を施す指導解説員の存在が不可欠である。そして、まず小中学校に出向いて、新しい拠点施設の内容とプログラムを説明し、校外学習等として誘致を図る必要もある。

例えば、市内の小学校 69 校（平成 18 年度）が訪れるとすると、新緑と紅葉のシーズンにはほぼ毎日、1 校以上が来館することになり、受け入れ側の人材面での対応も十分考慮する必要がある。



社会学習支援



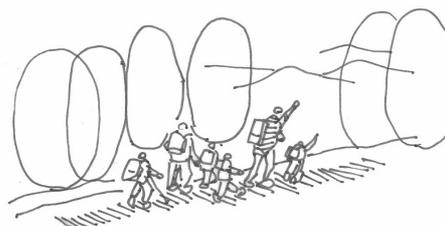
エ 体験学習

拠点施設は、高尾山の麓に位置しており自然の資源を活用した様々な体験型の事業が展開できる。特に、土日や祝祭日、夏休み等、子供たちが参加しやすい時期に体験教室を開催し、自然の魅力を体感してもらう。運営については、林野庁の高尾森林センターとの連携をはかる。また、自然の山をただ登るのではなく、一定の研修を経た指導解説員とともに登り、多くのことを自然から学べる取り組み、（仮称）ガイドウォーク制度を体験教室同様、高尾森林センターと連携してつくる。さらに、地域と協働しながら地元に伝わる藁・竹細工等の体験教室を開催する。

体験学習



自然体験ツアー



参考 高尾森林センターでは次のような体験学習事業が予定されている。特に子ども達への森林環境教育、情操教育を重点に置き親子で参加できるプログラムである。

高尾森林センターで予定している体験教室

子供向け	森林教室、植物観察、 林業体験（植樹・間伐・丸太切り・炭焼き）、 木工等体験（木工クラフト、火起し体験、糸鋸体験、紙すき体験）
一般向け	森林教室、植物観察 林業体験及び森林カレッジ（植樹・間伐・下刈り・丸太切り・炭焼き） 森林散策、木工等体験（木工クラフト、火起し体験、糸鋸体験、紙すき体験、草木染め等） 森林の写真指導（カメラスケッチング）

出典：高尾森林センター資料

オ 各種事業の開催

森林教室など体験学習機能のほかに、博物館機能の特性を行かした体験事業を開催する。旧博物館においても、下表に示すように「自然講座」や「自然調査会」あるいは「自然をしらべよう」など、年間 30 回以上の事業が開催されていた。拠点施設においても、これら教室開催事業は継続するとともに、市民団体等の協働でさらに新事業を開催する。

また、小中学校に出向き自然観察会等の授業を行う。そして、その発展型としてモバイル博物館構想を図り、各学校に資料を選び、ある期間展示する。この先進事例として、東京大学の総合研究博物館が都心のオフィスビルのロビーに剥製を展示している例がある。この構想は、拠点施設の事業の枠を出るが、所蔵品を積極的に外部に出し、空間を知的に変えようという取り組みである。これらの取り組みは、これを機会に、高尾山に来てもらえる動機付けを市民等に与えるとともに、拠点施設が身近な存在になる。ここでは、旧稲荷山小学校のスタッフとの連携を図る必要がある。

参考 旧東京都高尾自然科学博物館（平成 13 年度実績）

月	内容	定員（応募人員）
1月	メタセコイアの化石を探す	50人（150人）
2月	冬の虫たち	40人（55人）
3月	春を探そう	70人（169人）
4月	スマレを見にいこう	70人（317人）
	同上（高齢者対象）	（212人）
5月	初夏の森を歩こう	50人（95人）
	自然をしらべよう	
6月	自然をしらべよう	
	スマレの夏	50人（81人）
	ホテルに会おう	20組（208人）
	自然調査会	
7月	自然講座（自然を撮る）	50人（104人）
	自然講座（モミと昆虫）	50人（23人）
	自然調査会	
8月	自然をしらべよう	
	水の中の生き物	20組（169人）
	ムササビに会おう	40人（150人）
	自然調査会	
9月	自然講座（スズメバチはなぜ刺すか）	50人（62人）
	土の中の生き物	30人（18人）
	自然調査会	
10月	自然をしらべよう	
	自然と遊ぼう	15組（106人）
	自然調査会	
11月	自然をしらべよう	
	落ち葉の観察	50人（91人）
	自然調査会	
12月	ムササビに会おう	40人（96人）
	自然講座（ヒトと寄生虫のいい関係）	50人（57人）
クラブ等	自然観察会	
	高尾博物館倶楽部	年 20 回
	高尾植物クラブ	年 17 回

各種講座・研究会等



(3) 伝統文化機能

ア 伝統芸能の発信

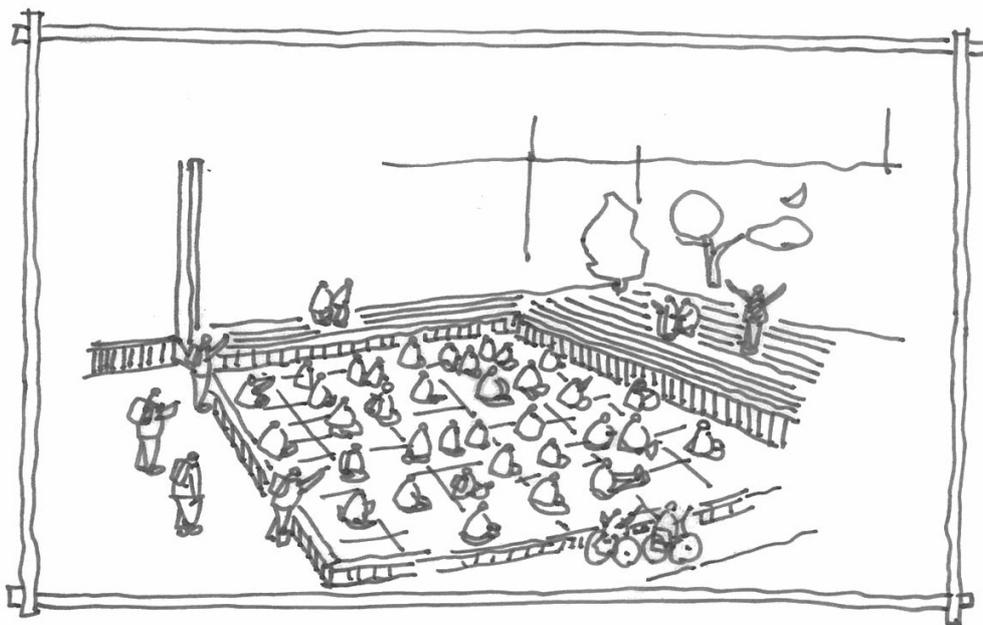
江戸時代から約 150 年続く八王子車人形の公演は、八王子市下恩方町に拠点をおく西川古柳座を招き、定期的な公演を事業化する。具体的な公演方法については、今後の検討に委ねられるが、観光客が楽しめるような演目を定期的に行う。観光に文化的な厚みが増すだけでなく、大きな観光の目玉、吸引力につながる。公演のみならず、^{けいこ}稽古風景の見学、人形遣いや語りの体験教室なども実施する。

この他、芝居小屋では市内の伝統文化を紹介する場として、次に示す獅子舞等、市内の伝統芸能の公演を行う。

八王子市指定無形民俗文化財等（郷土芸能）

- ・ 説経節の会(東京都指定無形文化財) ・ 木遣
- ・ 狭間の獅子舞・四谷の龍頭舞
- ・ 小津の獅子舞・美山町の鯨獅子舞・今熊神社の獅子舞
- ・ 田守神社の獅子舞・氷川神社の獅子舞・石川町の龍頭の舞

古民家での八王子車人形公演



(4) 交流機能

ア イベント等の開催

(ア) 広場の確保とイベント事業

現在、高尾山若葉まつりや高尾山もみじまつりなどの観光イベントは、ケーブルカー乗り場のもみじ広場を中心に開催されているが、やや手狭で、かつ、観光客の通行を妨げているのが現状である。

このため拠点施設に、これらイベントが開催できる広場を設けて、祭りのメイン会場とする。そして、子ども達・家族や若者向けの各種イベントを開催する。イベントは一時的に多くの集客があり運営にあたっては、地域との連携と協働がかかせない。

高尾山観光は特に冬や春のシーズンの入込みが少なく、この季節の集客を増やすことが課題であり、年間を通して多くの人を引きつける魅力あるイベントを催す。夜間のイベントや朝市や若者に人気のフリーマーケットなども考えられる。

(イ) 古民家での取り組み

古民家の芝居小屋では、たとえば自然環境を題材にした落語イベントなどもおもしろい取り組みである。八王子寄席というのがスタートしているが、高尾寄席があってもいいし、市内大学の落語研究会との連携も考えられる。

落語



イベント開催



イ 各種団体との交流

拠点施設の多様な業務は、施設職員のみで運営していくには限界がある。特に、博物館資料の説明や高尾山の自然や歴史案内などは専門的な知識が要求される。また、観光シーズンには多くの観光客が訪れることが予想され、それに対応した指導解説員等、人材の確保が必要である。このため、各機能を支援する関係グループやボランティア団体と協働で

運営を行うことが必要であり、相互の連携を図る体制を整える。

ウ 広報・啓発

多くの人々に拠点施設の存在と活動の内容を知ってもらい、足を向けてもらう取り組みが求められる。企画展やイベントの開催を広報で知らせることはもちろん、ホームページの管理やJR、京王電鉄の理解と協力を得て、効果的な広報をめざす。海外友好交流都市をはじめとする外国や外国人への情報発信や対応も重要である。

また、普及啓発は、広報のみならず自然や歴史関連の研究書も市民、大学、専門団体等の協働により発行する。専門性の高い内容を内在化することで、施設の質的向上を図る。

(5) 企画調整機能

ア 関係機関・地域との調整

高尾山には国や都の施設があるが、新たに市の施設が建設されることになる。それも高尾山周辺では規模的に最も大きく、高尾山の代表施設となる。それだけ地元の期待も大きく、他の施設や地域と年間の活動を調整していく役割を担う必要がある。これら施設の運営を取りまとめながら、効率的かつ魅力的な年間の高尾プログラムを作成する。そのためには関係機関・団体、横断的な運営機関をつくり効果的で連携のとれた運営と、事後の評価を行うシステムを構築する。

イ 指導解説員の養成

拠点施設の運営を左右するのは、そこで活動する人々の対応である。温かみのある応対と、丁寧でわかりやすい解説が評判を左右するであろう。毎日変化する自然を相手にしているという初心を忘れずに、職員同士での情報交換を欠かさないなど運営面での工夫が必要である。そして、一般市民や各種団体からのボランティアに対して、専門的な知識を備え、わかりやすく説明できる能力を身に付けてもらう養成事業を定期的実施する。

(6) サービス機能（収益事業）

ア 物販

登山、ハイキング客などアウトドア型レクリエーションにおいて、土産品を買う人は一般的に少ない。特にリピート客が多いところでは顕著であり、高尾山も例外ではない。一方、近年はそこでしか購入することができないミュージアムショップの売り上げが好調である。

博物館機能や八王子車人形に関連した、いわゆるミュージアムグッズの販売を行う。入場料の収益があまり見込めないなかで、この物販機能はニーズが合えばある程度の収益は期待できる。但し、デザイン的に良質であることと、比較的価格に手ごろ感のあることが条件となる。女性や子ども達の購買需要を検討し開発する必要があるが、開館に合わせて

販売するにはそれまでに開発製作をしておく必要がある。

博物館機能ではムササビのキャラクターは、人気がでると考える。

なお、地元には多くの土産品店があるため、販売品の種類等について調整が必要である。

イ 喫茶

ビクターセンターには一般的に、喫茶、軽食部門があるが、営業的にはあまり芳しくない。

アウトドア型の観光客が多いと予想される本施設においても、喫茶事業は需要が未知数であり、かつ、地元の飲食店との調整も必要とされる。しかしながら、地元のソバ等の競争を避ける品目で、独特の雰囲気の中で喫茶程度を用意し付加価値をあげる営業戦略はあり得るため、この機能については、事業主体の選定と合わせ今後の検討に委ねる。

(7) 総合運営機能

ア 管理事務

管理部門は、一般事務や施設管理を扱うことになるが、話題性をあげ公的な使命と観光面の効果、そして経営的にも良好な状態を維持するのは、大変な業務である。このため施設のスタッフは学識があり経営感覚にも優れた人材を確保する必要がある。

5 環境形成のテーマと敷地利用計画

(1) 環境形成のテーマ

施設整備にあたっては、高尾山(= 聖なる山)のふもとにあること及び回遊する楽しみをもてることを念頭に、「自然と歴史文化がありなす高尾らしいおもむきを醸し出す園づくり」をテーマに、全体として庭園のような空間をつくりだす。

テーマ	自然と歴史文化がありなす 高尾らしいおもむきを醸し出す園づくり
-----	------------------------------------

拠点施設の景観的な理想像は、老若男女が集い登山の疲れを癒したり、家族連れでレクリエーションを楽しんだり、子供たちが楽しく学習したり、若者たちが祭りやイベントに参加したりする姿が建物や樹木の間に見え隠れるような姿である。そして普通の公園にいるのとは異なる、どこか趣のある時が流れ、高尾山の麓に居るという安らぎが感じられるようなところである。

単なるビジターセンター、博物館というのではなく、もう少し和らいだ雰囲気もつところであり、公共施設に付けられる 館というのではなく、良質な現代の庭園、園という概念の方が適切である。そして、園には、次に示す動物園と同様の意味を内包する。

動物園は本来、zoological garden 直訳すると動物学・園である。福沢諭吉が動物園と訳したのとは異なる。つまり動物園とは「レクリエーションの場」だけでなく、この他に「教育の場」、「自然保護の場」、「調査・研究の場」という役割がある。

参考文献：旭山動物園の革命 角川書店 小菅正夫

知的レクリエーションの創造に向けて、旧博物館からの流れ、そして自然環境、高尾山の歴史文化を感じ、それぞれが情報を発信している、まさに知的な園、あるいは知的な香りが漂う環境が理想の姿である。

このような環境とイメージが、高尾の里に染み出し、里全体が「新しい門前町 = 現代に生きる門前町」になるような展開を期待する。

参考 建物のネーミングについて

拠点施設には、4つの施設を建設する。園という全体のまとまりのなかで、それぞれが存在感のある形態をもち利用者に親しみがもたれるような姿が理想である。

形態は、高尾森林センターは高尾山らしい風格のあるデザイン、古民家は民家風、新施設とサテライトの意匠は今後検討されるが、高尾の里の拠点らしいデザインの質が求められる。

また、建物に親しみをもたせるには、個性的で愛着のわくような名称をつけることが効果的である。何々センターというのではなく、例えば、

古民家は、旧金子邸を引き継ぐ金子座

高尾森林センターは、森全般ということで森の座

新施設は、高尾山全般という意味をこめて 高尾座

また、八王子の新しいシンボル施設であり、きわめて多くの人々が利用することを考えると、拠点施設のネーミングはきわめて重要な事項である。園という概念を与えるが、話題性と認知度を高めるには、公募することも考えられる。

(2) 敷地利用計画

ア 敷地の現況

計画地は、西側から東側へかけてなだらかな傾斜がついているが、旧博物館が立地していた部分を除き、ほぼ平坦な形状である。敷地西側の旧博物館の立地部分は、前面の園路等より約 1.7 m 程度の雑壇状となっている。また高尾森林センターの地盤は、旧博物館立地部分より約 1.3 m 程度低い。

敷地東側は案内川と接しており、案内川にかかる高尾新橋（幅員 6 m）にて国道 20 号に接している。敷地北側は、店が並ぶ参道（都道 189 号線 高尾山線）に接しており、西側は道をはさんで住宅等が数軒ある。南側隣地は畑である。

イ 施設配置計画と道路の整備方針

敷地南西隅に高尾森林センターが先行して建設されており、新施設との関連性や、国道 20 号や高尾山参道からのアプローチ空間を十分に確保するため、新施設はほぼ旧博物館の位置とする。また、既存施設と同様の位置とすることにより、周辺環境への影響の変化を軽減することにもなる。また、古民家は新施設との連携を考え、新施設の北東に配置する。

国道 20 号から新施設の間、イベント等にも活用可能な広場を設け、そこに隣接して、イベント用の倉庫や、トイレ等を備えたサテライト施設を設置する。

本計画地には、高尾森林センターと、新施設、古民家、サテライト施設が配置される。高尾森林センターとその他の施設については、事業主体や運営も別々であるため、原則的には建築基準法上、各々道路への接道が必要となる。そのため、高尾新橋から参道へぬける道路（幅員 6 m 以上）を設け、敷地境界を設定し、各々別敷地として計画するのが一般的な手法である。

敷地内の安全性や良好な環境の保持のため、一般客の施設へのアプローチは原則として、徒歩によるものとする。また、高尾新橋については、緊急車両等の通行に必要な整備を行うものとする。

ウ 造成の方針

既存の地盤レベルをできるだけ活かす計画とし、盛土、切土がバランスのとれた造成計画とし、排出残土が極力出ない計画とする。新施設の地盤レベルの設定については、今後旧博物館の雑壇部分の扱い、高尾森林センターの宅盤レベル、平滑なアプローチ、開発申請の可否等を考慮し、総合的に検討するものとする。

(3) 植栽計画

ア 敷地の現況植栽

敷地中央のロータリー部には、主にツツジ類等の低木、敷地周囲には高木類が植えられている。樹種についてはラクウショウ（原産地 北アメリカ東南部）、メタセコイヤ（絶滅したと思われていたが1945年 中国四川省で発見）、オオシマザクラ（伊豆地方特産）、ドイツウヒ（原産地 ヨーロッパ）等の外来種や、高尾の自生でない樹木も多く植えられている。

イ 植栽の方針

植栽計画の方針は、環境形成のテーマにある、高尾らしいおもむきを醸し出す園づくりを具現化するうえで、最も適切な植栽を施すこととする。この方針にそって、既存樹木の取り扱いや新規植栽の樹木を選定する。

さらに、園内の雰囲気づくりのため、通路には中低木を配置する。ただし、樹木で死角空間ができることを避けるため、植栽にあたっては適度の見通しを確保するなど、防犯面に十分配慮する。また、古民家周囲にも、古民家本来のしつらえに倣い、通路から直接古民家がみえないように、生け垣等を配置する。

樹種については、例えば高尾自生の植物を見学、鑑賞できるように配置したり、鳥飼木（ちょうしもく：実がなる木で、鳥が集まるもの）を集めたコーナーを設けるなど、学習・観察に利用できて、なおかつ園内の雰囲気に調和した、美しく特徴を持った植栽計画とする。

また、花については、女性層に人気があり、潤いとシャッターチャンスとなるような演出的効果の高い植栽を施す。

(4) 屋外施設の内容

ア 道路

複数の施設を建築する本計画では、建築基準法を遵守するうえで、道路に各建築物の敷地が接する必要がある。このため敷地の東側に、甲州街道(国道)から高尾山参道(都道)に通じる道路を新設する。

舗装は高尾山参道と同様、石舗装が理想である。なお、この道路は、敷地内の安全性や静かな環境を維持するうえで、一般車両の通行は、原則禁止する方向で関係機関と協議する。

イ 橋梁

甲州街道と敷地を結ぶ案内川に架かる橋梁(高尾新橋)については、現在、幅員は6mあるが構造上の問題、および大型の緊急車両等の円滑な乗り入れができるように、構造的にも安全なカタチで整備する。

ウ イベント広場

現在、若葉まつりやもみじまつりは、ケーブルカー乗り場前面のもみじ広場で行っている。しかしながら、手狭であり、道路の通行を妨げているのが現状である。この他に高尾の里には、面積的に広さを確保できる場所がなく、安全で大きなイベント広場が求められている。本計画では、これらイベントが開催可能で、面積はもみじ広場を一回り大きくした平坦な広場を確保する。面積は700~800㎡とする。

エ 駐車場

敷地の広さから判断して、大きな駐車場を確保することは困難であるため、敷地内には、一般利用者の駐車場設けない。但し、管理用や身障者用としては延べ10台程度は確保する。配置は一箇所に固まらず、各施設に隣接して、分散させ樹木の下などに設置する緑陰駐車場とする。

なお、圏央道インターチェンジが完成し、広域からの車利用の観光需要が増えるものと想定されるため、高尾の里全域で駐車場対策を検討する必要がある。

オ 高尾森林センターとの共有広場

新施設と高尾森林センターの間に、相互で活用できる体験学習の広場を設ける。

体験学習をするため外部用の机、イスを配置するので、ウッドデッキのような潤いのある仕様とする。また、夏場の日差しを遮る樹木等の植栽を施す。詳細な内容については、今後高尾森林センターと協議し設定する。

カ 親水機能

施設内に、水が流れている風景は、それだけで安らぎを感じさせる。

高尾の里には水路が流れ、高尾山からの水資源を有しているが、殆どそれらが家や看板に隠れて表に出ることがない。拠点施設内に水の流れをつくり、高尾の里の水資源の再生を図る先進モデルと位置づけ整備を図る。水の確保は、水路や地下水等、今後の検討に委ねるが、西から東にかけて緩やかな傾斜に沿って流れる浅いせせらぎと、鯉のいる小さな池の景観を目標とする。

また、案内川の自然地形をいかす親水機能として、4~5 mある段差をうまく活用した親水広場の整備を検討する。安全性には十分配慮する必要があるが、川に触れられる空間が少ない今日、人気のでる場所になるものとする。

キ 花等の活用

花は集客力がある。それもどちらかという女性客が少ない高尾山にとって、女性を引き付ける魅力がある。敷地は、さほど広くないないので大掛かりなお花畑は出来ないが、箱庭のような雰囲気^{はなぞの}で花園をつくりシャッターチャンスとなるような風景をつくる。もちろん、高尾山のシンボルである紅葉も忘れてはならない。通路には紅葉の道も楽しい。また、広場の周囲に桜を配し、桜広場とするのも楽しい。

ク 建築物との調和

敷地がさほど広くないため、建物内外を一体的にデザインし、小さな外部空間を巧みに演出することが重要である。日本庭園のきめ細かなデザイン的な配慮（和風にするというのではなく。）を取り入れながら、高尾山らしい景観形成を図る。

主な屋外施設の内容

構成	内容（面積算定の根拠）	面積等
道路	幅員 6 m以上	約 400 m ²
高尾新橋	緊急車両等の通行に必要な整備をする。	
駐車場	管理用、身障者用 ただし、分散し、1ヶ所にまとめない。	約 200 m ²
イベント広場	もみじ広場より一回り大きく、ほぼ平坦に。	700 ~ 800 m ²
高尾森林センターとの共有広場	ウッドデッキの体験広場	150 m ²
親水機能	案内川への接近、川・水路の水活用を検討して親水機能を確保	
植栽	高尾山のシンボルであるモミジをはじめ、季節を楽しめる花の植栽	



全体配置図(参考図)



全体イメージパース

6 新施設の建築計画

(1) 新施設の規模と内容

ア 室別の規模

新施設の各室面積は次に示すとおりであり、合計は1,500 m²である。

この新施設は、多様な利用パターンを想定しており、予想を超える利用者数、及び利用形態が今後発生する可能性が高い。このため、平面形態は可能な限り柔軟な活用が図れることを念頭に置く。なお、この面積表の根拠は、廊下等の共用部分が少なく、かつ間仕切りの少ないオープンな利用形態を想定している。

室別の規模

		内容（面積算定の根拠）	面積（m ² ）
主に 1階	観光情報コーナー	映像装置	200
	学習情報コーナー	検索性パソコン、書棚等	
	常設展示コーナー	天井高さ5m以上が理想	500
	常設・企画展示室	常設と企画の配分は適宜調整	
	インフォメーションコーナー	カウンターで対応	180
	売店コーナー	事務室に近くに確保	
	事務スペース	7~8人	
	倉庫（兼作業室）		80
	トイレ	トイレは外部から直接利用することも考慮	80
	機械室		100
主に 2階	レクチャールーム（兼会議室）	80人程度収容	120
	ボランティアルーム		80
共通	エントランスホール・階段・エレベーター等	100人程の児童等が一時待機できるスペース	160
合 計			1,500

イ 室別の建築条件

(ア) 観光情報コーナー

映像装置とベンチ又は腰掛ポールを配置する。立見でも見れるように映像装置はやや高い位置に置く。またパンフレット類や高尾山や八王子のマップを展示する。

(イ) 学習情報コーナー

高尾山や八王子に関する図書の書棚を置き、かつ情報検索ができるパソコンを数台配置する。

(ウ) 常設展示室・コーナー

高尾山の歴史文化と自然を常設展示するスペースである。誰もが気軽に鑑賞できるように、ラウンジ等と分離せずにオープンな空間とする。天井高さは、4~5 mほど確保する。なお、常設と企画展示の面積は合計 500 m²程度とする。面積配分は、今後の検討に委ねるが、両展示の間仕切りは、可動として柔軟性を持たせて置くことが望ましい。

(エ) 企画展示室

常設展示とは分けて、独立した空間を確保する。有料の場合があるため、事務スペースから近い位置に入口が設定できることが望ましい。天井高さは5 m以上とする。

(オ) インフォメーションコーナー

低いカウンターで座って気軽に相談できるような環境をつくる。ここは施設の中心であり、館内のユーザーの動きが目に入りやすく、かつ管理部門との連携が図られやすい位置に配置する。

(カ) 売店コーナー

多くの利用者が見込める施設では、土産品の売り上げは歳入の大きな要素である。利用者に存在が、わかりやすいことが重要である。また、事務スペースに近い方が管理面では望ましい。

(キ) 事務スペース

インフォメーションコーナー同様、館内の状況を把握しやすく、かつバックスペースにも近い位置に配置する。7~8人の事務机と男女のロッカー室を確保する。

(ク) 倉庫(兼作業室)

倉庫の配置は、管理用と展示用とがある、展示の搬出入や製作との関連で設定する。

(ケ) トイレ

トイレはビジターセンターの計画ではきわめて重要な要素である。内部と外部から利用しやすい位置に、相当数のトイレを設置するとともに、清潔さを保つ必要がある。トイレの感じで施設のみならず観光地の評価が決まると言われている。このため、管理部門に近い位置に配置しておくことが望ましい。多目的トイレ(誰でもトイレ)も設置する。

(コ) 機械室

機械室の面積は、設備のシステムに左右されるが、メンテナンスや機械の搬出入等が用意な位置とする。また、新しいサステナブル(持続可能な)な設備を選択した場合は機械室の概念も変化し、例えば地中梁で構成するピットも設備空間となる。

(サ) レクチャールーム (兼会議室)

小中学生の団体や研究会、各種教室や会議室として使用する。80人程度の収容が可能なことと、映写、スクリーン等の設備を付設する。なお、地域開放については使用条件等、今後協議する。

(シ) ボランティアルーム

各種ボランティアの打合せ用の会議室兼作業室で、収納または倉庫を付置する。

(ス) エントランスホール

新施設の入り口で、顔となりかつ温かく向かえるところでもある。新施設内の配置がわかりやすく認識できるように、できるだけ全体の中央にあることが望ましい。外部でも良いから、ホール近辺で100人程度の児童等が集合できるスペースを確保する。

(セ) 休息スペース

休息スペースとして特別に空間を確保するのではなく、新施設内・外全体にベンチ等を配置する。例えば、外壁沿いの暖かなスペースに長くベンチを確保する。

(2) 建築計画の前提

建築計画の前提を一言でいえば、ニーズの変化や多様化に対応可能な構造を持つことである。

観光情報の発信や映像も含めた展示などの手法は、技術的な進歩が激しく、10年でリニューアルしなければ陳腐化する。また、観光や博物館機能の内容や社会的なニーズも時代とともに変化している。一方、これからの建築物は構造的には100年もつことが要求されるが、その変化に対して柔軟に対応できる構造であることが求められる。

そのためには、構造的に平面を分割するのではなく、可能な範囲でオープンな、かつ同一フロアにすることが望ましい。利用者が限られる室は2階に配置する。外部空間を広く確保するためには、建物はなるべくコンパクトにしたほうがベターあるが、後々の使い勝手を考慮すると、1階を広く確保することが適切と考える。

ただし、将来増築ということに対して、平面的な拡張は難しいと考えられるので、例えば、屋上や吹抜けに増築ができるような仕組みを計画するなど、今後検討する必要がある。

内部の環境面で、重要な点は登山の疲れを癒されるような安らぎの場を提供することである。清潔なトイレもその一つであり、常にユーザーの視点に立った計画である必要がある。

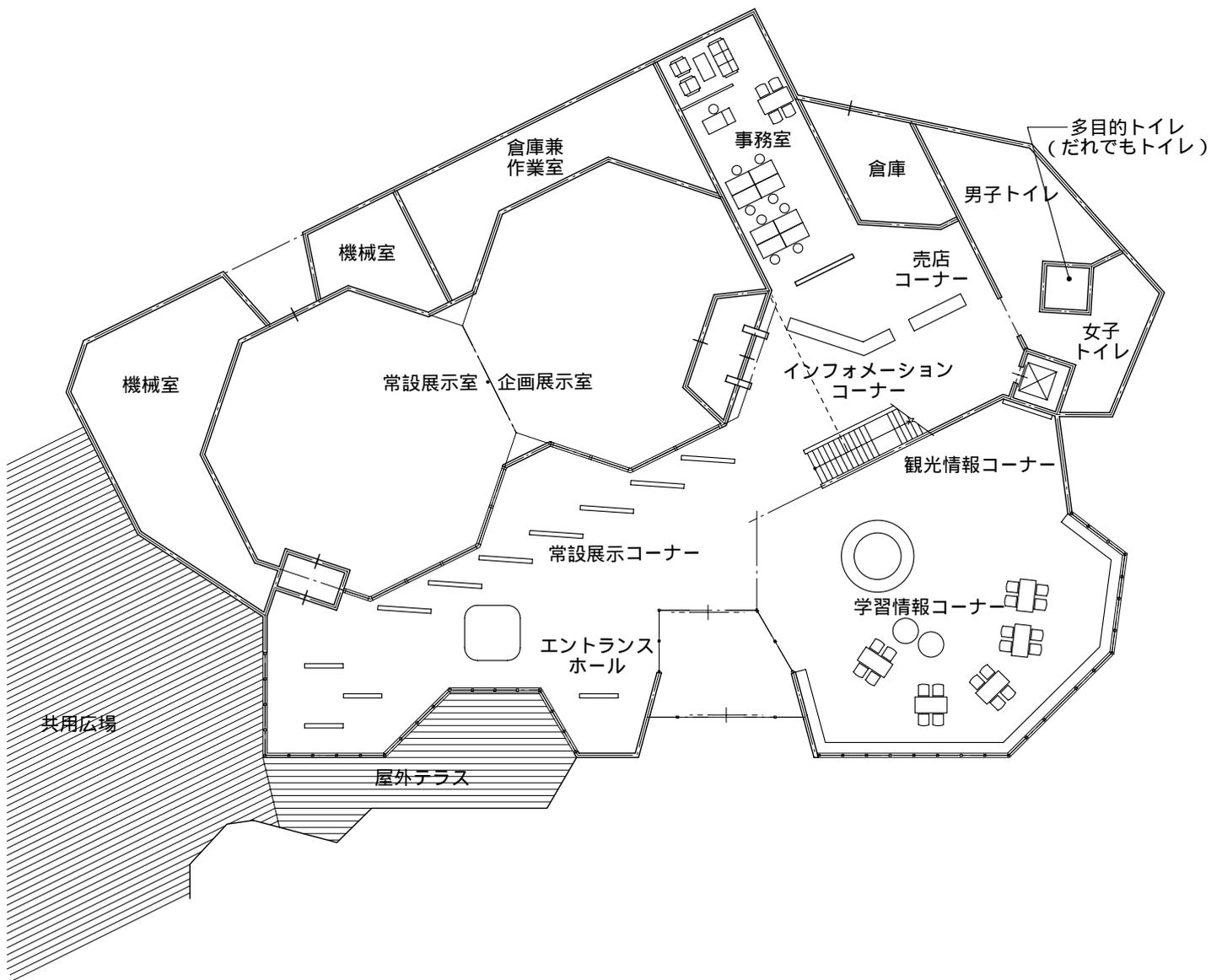
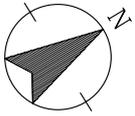
また、建物と外部空間を巧みに連続させ、お互いの広がりを持たせながら、個性的な場を創出する。

そして、今日の建築界の大きなテーマであるサスティナブル（持続可能な）な要素を取り入れる。高尾山の麓にたつ模範的な取り組みとして、自然エネルギーを積極的に取り入れ、それを一般の利用者に見えるかたちで備え啓発を図る。

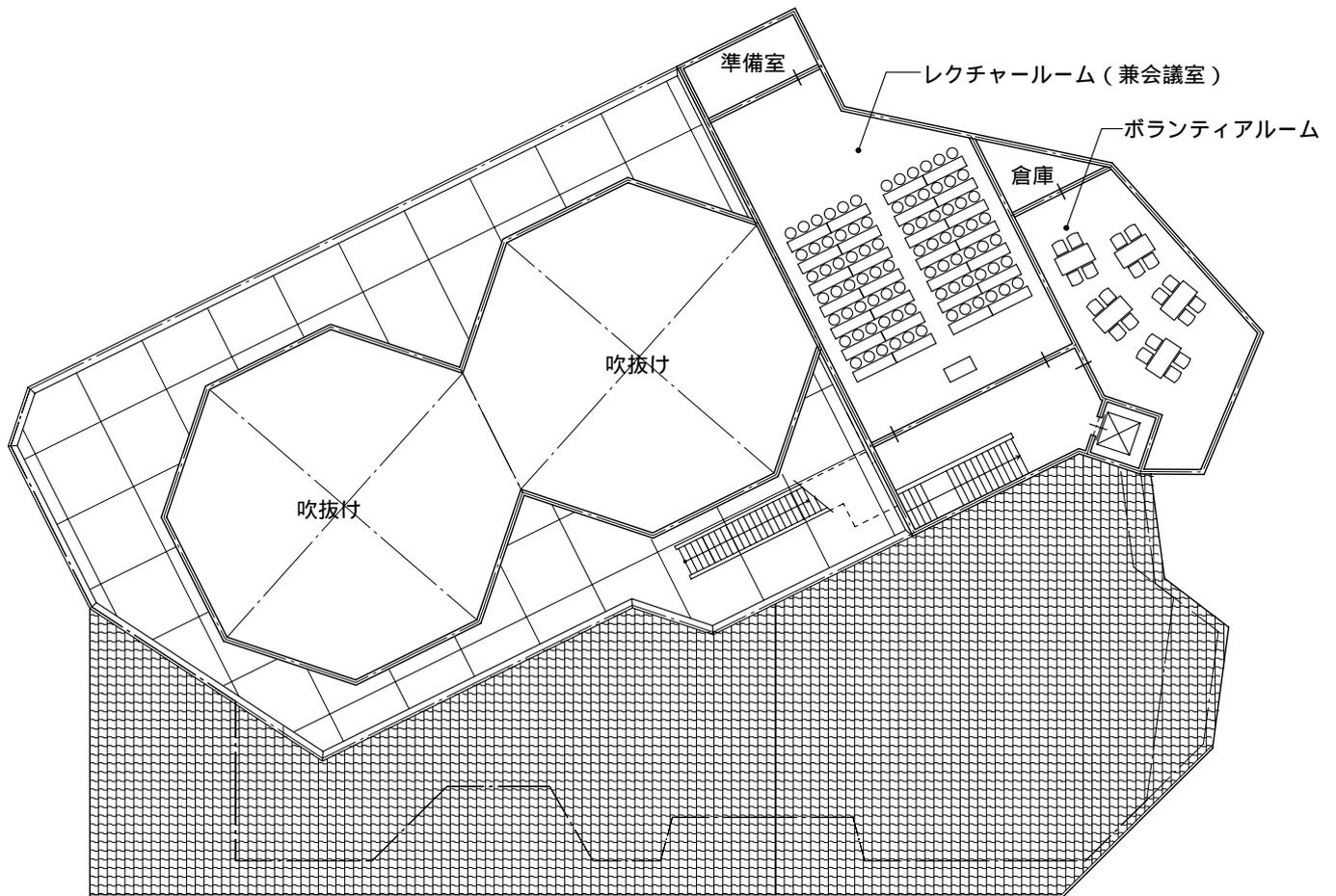
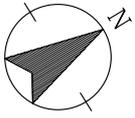
- ・ 将来においても、様々な展示形態に対応できる柔軟な平面形態
- ・ 移動のしやすさや効率的活用をめざすうえで可能な範囲でオープンな同一フロアを確保
- ・ 疲れが癒されるような安らぎの場の提供（ベンチの設置）等、ユーザーの視点が重要
- ・ 自然エネルギー活用の模範となるようなサスティナブル（持続可能な）な設備
- ・ 中庭や窪みなど外部空間を取り入れ、空間に広がりを持たせる

外観のデザインは今後の検討に委ねられが、基本は高尾の里の拠点として落ち着きと風格のある質の高いデザインが求められる。

また、内部と外部が全く閉ざされるのではなく、空間の連続感を確保し、広がりと変化をもたせることが望ましい。



1階平面図 1/300 (参考図)



2階平面図 1/300 (参考図)